



鉄道班では2000年から「きかんしゃトーマス」とその仲間たちを製作している。設計図を起こすところからスタートするため、1体の制作に数年かかることも



芝中学校・芝高等学校

生徒の自立を促し、やる気を引き出す 手塩にかけた“芝漬け”教育

自らがいろいろ手をかけ大切に育てていくことを「手塩にかける」という。芝の教育は、まさにその言葉通りだ。教員たちは生徒とともに行動し、新たな挑戦を助け、丁寧に自立と成長を促す。これが愛情をたっぷり注ぐ“芝漬け”教育だ。一人ひとりが自分の考えを持ち、仲間と育て合える理想の環境を、技術工作部顧問の寺西教諭は「寺子屋」と表現した。“芝漬け”教育の到達点は、ここにあるのかもしれない。

歴代の先輩たちから 受け継がれる技と心

現在高2の内藤恵介君は、中学受験の合格発表の時、同校の教員からこんな話を聞いた。「この学校は面白いよ。地下1階にね、たまにフオークリフトが走っているんだから」不思議に思ってた階へ降りてみると、つなぎを着た生徒たちがあちこちで作業をしている。「なんだか面白そう」。内藤君は、自分も仲間に入ろうと決めた。

芝中学校・芝高等学校の技術工作部は、創部からおよそ半世紀。伝統あるクラブだ。部員数は約70名。1つの部でありながら、活動内容は大きく鉄道、自動車、そして船舶・飛行機の3つの班に分かれている。中学で1つの班を選んで入部するが、高校生になると班に関係なく部の活動全般に関わることになる。

「僕は、鉄道班へ入りました。最初は何をやっているのかもよくわからなくて、先輩に教えてもらいながら、作業内容や道具の名前を一つひとつ覚えていきました。部の全容がわかったのは、高校になってからです」と内藤君は笑う。入部当時は何も知らなかったが、今は部長としてすべての部員を率いる立場になった。「運営は高2が中心です。仲間と役割分担して作業を進め、部長の僕が最後に確認します。報・連・相は重要ですね。中学生のうちはなかなかできないけれど、だんだんできるようになります。僕もそうです」

技術工作部は、外部のイベントに参加することも多い。例えば鉄道班は、公共施設等のイベントでミニ機関車に人を乗せて走らせることもある。内藤君たちはイベントを無事に終えるために、行動のしおりや機関車の取り扱いマニュアルなどをそろえ、後輩の接客態度なども細かくチェックする。「イベント会場で相手にするのは、ほとんどが

技術工作部は今年からは船舶のイベントも始めた。初回は3校の参加だったが、今後はもっと増えていくだろう。「挑戦する学校への技術提供も行って」と顧問の寺西教諭



子どもです。生身の人間だからこちらの思い通りに動かないし、予想外の行動をとったりします。部員一人ひとりが臨機応変に最善の策をとることが大事なんです」と内藤君。

落ち着いてものごとに対処できるのは、中1から先輩たちと一緒にいろんな経験を積んできたおかげ。さらには、OBたちが学生時代に積み上げてきた成功や失敗の体験も、現役部員たちを支えるベースとなっている。

そろそろ部長交代の時期。ここからは大学受験に気持ちをシフトする。「プロダクトデザインに興味があるんです。志望校も絞れてきました。ものづくりへの好奇心は、さらなる未来へとつながっていく。」

ンジ」に参加を続け、今年で15回目となった。そして、今年からは船舶・飛行機班でも新たな挑戦が始まった。手作りの船を運河に浮かべるイベントを同校主催で行い、来年以降も参加校を募っていく予定だ。

「対外的なイベントは生徒たちをものすごく成長させてくれます。人が乗るものを作っているから、会場で『動きません』というわけにはいかない。問題、解決を繰り返すことで、精度も上がります。人から教わるだけでなく、自分で考えるから力がつくんです」と顧問の寺西先生が話す。もちろん、教員のサポートが必要なときもあるが、生徒主体でものごとに取り組むことで、一人ひとりの自主性・自立心に磨きがかかっていく。

「私は究極の教育機関は寺子屋だと思っています。寺子屋には先輩が後輩を手助けして育てていくイメージがあるんですね。高い目標を掲げるのは教員の役目かもしれませんが、みんなで協力してものごとに取り組む、誰かを喜ばせたり、楽しませたり、役に立つ喜びや達成感を味わってほしいと思います」



部品の発注も生徒が行う。授業では英語の苦手な生徒がアメリカの部品メーカーにてきばきと発注し、専門の工業用語も英語でやりとりする。「好きこそもの上手なれ、ですかね」と寺西先生は笑う



「生徒たちの自由度が高い学校だと思います。ある程度やりたいこともできますし……」。技術工作部の高2のメンバーが話してくれた

夏合宿の昼食は、自作のピザ釜で焼いたピザだったそう。「生地から手作りしておいしかったですが、材料を作り過ぎて100枚以上焼きました。夕飯もピザになっちゃいました(笑)」(内藤君・高2)